# 出羽三山神社

#### 御鎮座地

月山神社本宮・・・山形県東田川郡庄内町立谷澤字本澤31 月山山頂 出羽神社(三神合祭殿)・・・山形県鶴岡市羽黒町手向字羽黒山33 羽黒山山頂 湯殿山神社本宮・・・山形県鶴岡市田麦俣字六十里山7

#### アクセス

#### 月山神社本宮 . . .

月山八合目駐車場から徒歩3時間

#### 出羽神社(三神合祭殿)・・・

随神門から・・・徒歩1時間 羽黒山有料道路を経て羽黒山駐車場から・・・徒歩10分

#### 湯殿山神社本宮...

湯殿山有料道路を経て仙人沢無料休憩所からバスで 10 分・徒歩で 30 分

#### 参拝時間

月山神社本宮・・・午前5時から午後5時まで(7月1日より9月15日まで) 八合目・月山中之宮・・・午前5時から午後5時まで

(6月20日より10月10日頃。6月中は除雪状況による)

出羽神社(三神合祭殿)・・・24時間

湯殿山神社本宮・・・午前5時から午後5時まで

(4月29日より11月3日頃まで。積雪期は閉山。開山祭は6月1日)

# 神拝詞出羽三山神社

# 祓詞(はらえのことば)神社本庁

# 三語拝詞 (さんごはいじ) 三回奉唱

身の穢れを祓う「祓詞」・神々を拝する「神詞」・天津日嗣(天皇)の長寿を祈念する「賀詞」の三種があり、日常の神社での御祈祷をはじめ、諸祭典で唱えられている。
はらひことば
成 詞

もろもろ つみけがれ はら みそぎ すがすが 諸々の罪穢 祓ひ禊 て清々し

かみことば **神 詞** 

ほぎことば **賀 詞** 

> あまっひつぎ さか まさ あめつち むたとこしへ 天津日嗣の栄え坐むこと 天地の共無窮なるべし

## 三山拝詞(さんやまはいじ)

たった。 綾に綾に奇しく尊と 月 山 神 の御前を拝み奉る 出対の共神へ

綾に綾に奇しく尊と 出羽神の御前を拝み奉る

湯殿の御山の大神へ

# 三山祝辞(さんやましゅくじ)

出羽三山の特徴・由来・神威・信仰などが分かりやすく書かれており、江戸時代までは神仏混淆の影響で経文風であったものを明治時代に当時の宮司が神道風に制作した。

慎み敬って月山大神(ガッサンダイジン)羽黒山大神(ハグロサンダイ ジン) 湯殿山大神(ユドノサンダイジン) の御前に申して白さく て惟(オモ)むみれば 顯幽(ケイユウ)二界の中八百萬神あり 萬神皆我大暘谷(タイヨウコク)大扶桑國(タイフソウコク)に居まし て延喜官帳載する所二千八百六十有一社是なり孰れも神變(シンペン) 不思議にして靈頼(レイライ)著しと雖も殊に勝れたるは奥の三山なり 爰(ココ)に委(クハ)しく三山の由来を尋ね奉るに神代より大神この 三山にゐまして靈徳を奥羽佐信越の五州に降し給ひ 後関東八州に及ぼ し遂に大日本全州に洽(アマ)ねし 初め五州を鎮守し給ふときんば五 州の老若渇仰景慕(カツギョウケイボ)し八州を鎮守し給ふときんば八 州の男女欽仰子来(キンコウシライ)す 忝けなくも我國は是れ天照大 神の鎮統にして天地開闢以降皇統一系の神國月山是れ天照大神の同胞月 讀尊鎮座の神山なるをもって神國の人神山に来往するは天理固(モト) 羽黒山湯殿山も亦神縁を同じうす この故に地上靈域多しと 雖も三山に勝れたるものはなし 三山は金銀を土と為し珠玉を石とす 甘露零(オ)ち寶泉涌く五味の藥湯渓間(ケイカン)に迸流(ヘイリュ ウ) す 其の奥の院に至りては巒峰(ランポウ) 高く聳え渓壑(ケイカ

ク)深く下り石徑(セッケイ)崎嶇(キク)として鳥獸も輙(タヤ)すく攀縁(ハンエン)し難し 況んや人類においてをや大神擁護の靈頼は往時獨り開祖に集る開祖その神徳を仰いで月山よりも高しとす かるが故に先ず月山に登り給ふ こゝを以って月山の神威日光と赫耀(カクヤク)して延(ヒイ)ては羽黒の峰に映じ延いては湯殿の嶽に輝く開祖神徳を宣揚して教化を敷行(フョウ)する慈仁を體とし敬愛を用となし一切蒼生をして神縁を結ばしめ給ふ

そもそも三山參詣の輩は身に白栲の浄衣を着け首に蘿鬘(ラマン)の寶 冠 (ホウカン) を載き七五三の注連を掛け手に八房の鈴鐸 (レイタク) を取り朝(アシタ)に江水(コウスイ)を掬(ムス)び日積月積の汚れ を洗ひ 暮に煙嵐 (エンラン) に嘯ひて無量の神徳を念じ真賢木を樹て 神籬を浩り百取(モモトリ)の机を設け千種(チグサ)の酒饌を供へ往 昔開祖の難行を慕ひ別火の法を修し心裡の汚れを焼く夫(ソ)れ瀧に浴 して大神の感應(カンノウ)を祈るときんば苦行を宗となし席に坐して 綾瓊 (アヤニ) の神文を誦するときんば敬愛を念と為すかくの如く實 (マコト) に信心を致すときんばいかでか幽眷 (ユウケン) を蒙らざら んや ひとたび歩みを運ぶ輩は無彊(ムキョウ)の神感を得(エ)無量 の幸福を受くること必然たり仰ぎても尚仰ぐべきは神明の幽契(ユウケ イ)なり恭っても復(マタ)恭ふべきは開祖の徳澤(トクタク)なり影 の形にそい響きの音に應ずるが如く行者の信心を移すときんば感應も亦 知るべきのみ禳災(ジョウサイ)求福願海(ガンカイ)は深うして且つ 廣し 唯願はくは末代の行者猛省勇進(モウショウユウシン)一世艱苦 の行を修し三語修法の文を唱へ至誠神明を敬禮(ケイライ)し奉るべき ものなり

### 三山神拝詞(さんやましんぱいし)

あまつひ いではのくに みしねかるたがはのこほり あまそそりたか そび くもきり 天津日の出羽国の 美稲刈田川郡に 天噌噌利高く聳えて 雲霧の うへ いで さきくさ みつのみやま かぜ と とほつかみよ むかし とことは 上に出たる三枝の 三 山に 風の音の遠津神代の古昔より しづまりいま かけまく あや かしこ つきやまのおほかみ いではのおほかみ ゆどのやまのおほかみたち 鎮 座 す掛巻も綾に 畏き月 山大神 出羽大神 湯殿山大神等 うづ おほみひろまへ つゝし うやま かしこ かしこ まを 貴の大御広前に 慎み敬ひ恐み恐みも白さく すめらみこと むかし 天 皇 と往古 おほやしまぐにすべしろしめす すめみまのみこと たなが おほみよ かきは ときは より大八州国総所知食 皇御孫命の手長の大御代を 堅磐に常磐に いはいまつ おほみよ たらしみよ さきは まつ あまつひつぎ たかみくら うごきな  $^{\hat{a}}$  春 り 茂御代の足御世に 幸  $^{\hat{a}}$  本 り 天津日嗣の高御座の 動 無く あめつち むたきはまりな おほましまさ たま みこたち はじ ももの 天 地 の 共 第 無く 大 座 座 しめ 賜 ひ 親 王 等 を 始 め 百 いやつぎつぎ 弥継続に つかさびとたち たひら やすら まもりたま すめら おほみかど たゞ なほ 官人等を平けく安けく守護給ひて 天皇が朝廷に忠正しく誠直く つかへまつら たま すめらおほみくに おほみいづ あさひかがや みつのみやま いやたか 仕奉しめ賜へ 皇大御国の大御稜威は朝日輝く三 山の弥高に

いやひろ かがや さかえ たま よも くに おほみたからたち いかしゃくはえ % 広に 輝かし 栄しめ給へ 四方の国の公民 等を 伊賀志郁久波廷 ごと たちさかえ たま とりつくるおきつみとし はじ くさ かきは いたるまで  $\mathbf{o}$  如  $\mathbf{c}$  立 栄 しめ 賜 ひ て 取 作 奥 津 年 を 始 め 草 の 片 葉 に 至 迄 あらきかぜあらきみづ あは やつかほ いかしほ なしみのら たま またおほかみ あらきかぜあらきみづ あは やつかほ いかしほ なしみのら たま またおほかみたち 荒 風 洪 水 に逢 しめず 八束穂の茂穂に成実入しめ賜ひ 及大神等 それがし おなじこゝろ あふぎたてまつ たふとみまつ ひとども ことわり かな**を 某 と 同 心 に 仰 奉 り 尊 奉 る 崇敬者が 道 理 に 叶 はむ** のみのこと のみ ことごとさきは たま めぐみたま もし あやまちおか つみけがれ あら 祈 事 は 祈 の 尽 幸 へ 給 ひ 恵 愛 賜 ひて 若 も 過 犯 せる 罪 穢 の 在 はらひがは ながれきよ はらは たま いへのなりはひ さかえ やぬちむをば 祓川の流清く祓しめ給ひて 家 業 を繁昌しめ 家内 おだひ うからやからおの むきむきあることな ゑらゑら わら むつ にぎは いへ あら 安全に親族家族 己 が 乖 向 在 事 無く 恵良恵良に 笑 ひ 睦 び 和 ふ 家 と 在 し たま おのもおのもいぬちなが そのうみのこ いやつぎつぎ たちさかえ たま 各 々 寿命長く 其子孫の弥継続に立 栄しめ賜ひて やそまがつひ まがことあら よる まもり まもり ひ まもり まもりたま 八十禍津日の凶悪事有しめず 夜の守 に 護 日の守 に護 賜 7日の守に護賜ひて いづ みたま さきは たま しろたへ そでかきあは うじものうなねつきぬき 厳重の霊徳を 幸 ひ賜へと 白 栲の袖 掻 合せ 鵜自物頂根突抜て うじものうなねつきぬき かしこ かしこ まを み 恐 み白す

#### 神棚拝詞(かみだなはいし)

これ かむどこ ま か かしこ あまてらすおほみかみ うぶすなのおおかみたち 此の神床に坐す 掛けまくも 畏 こき 天照大御神 産 土 大神 等のおほまへ をろが まつ かしこ かしこ まを 大前を 拝 み奉りて 恐 み 恐 み 白さくおほかみたち ひろ あつ みめぐ かたじけな まつ たか たふと みをし 大神 等の広き厚き御恵みを 辱 み奉り 高き 尊 き神教へのまにまになほ ただ まごころもち まこと みち たが お も わざ はげ 直き正しき真心以て 誠 の道に違ふことなく 負ひ持つ業に励ましめたま いへかどたか みすこ よ ひと つ たま 給ひ 家門高く 身健やかに 世のため人のために尽くさしめ給へとかしこ かしこ まを 恐 み 恐 みも白す

#### 祖霊拝詞(それいはいし)

代代の先祖等(何某の御霊)の御前を揮み奉りて慎み敬ひも首さく 広き厚き御恵をで辱がみ奉り 高き尊き家訓のまにまに 身を慎み業に励み 親族家族諸諸心を替せ 睦び和みて 敬ひ任へ奉る状を 愛ぐしと見そなはしまして 子孫の八千続に至るまで 家門高く立ち栄えしめ給へと 慎み敬ひも首す

#### 食前感謝 静座。一拜一拍手

たなつもの音の木草もあまてらす日の大神のめぐみえてこそ。頂きます。

#### 食後感謝 端座。一拝一拍手

朝よひに物くふごとに豊受の神めぐみを思へ世の人。御馳走さま。

#### 祓詞(はらえのことば)

かしていざなぎのおおかみ つくし ひゅうが たちばな おど あわぎはら掛けまくも 畏 き伊邪那岐大神 筑紫の日向の 橘 の小戸の阿波岐原にみそぎはら たま とき な ま はらへど おおかみたち もろもろ まがごと つみ けがれ御禊祓へ給ひし時に生り坐せる祓戸の大神等 諸諸の禍事 罪 穢 あ はら たま きよ たま もう こと き め かしこ かしこ有らむをば 祓へ給ひ清め給へと白す事を聞こし食せと恐み恐みももう白す

#### 身滌祓詞(みそぎはらひことば)

たかあまのはら かむづまりま すめむつかむろぎかむろみのみことも ひふが たちばな をど高 天原に神留坐す 皇親神漏岐神漏美命以ちて 日向の 橘 の小戸 あをぎがはら ここのはしら かみ やそまがつひのかみ かむなほびのかみ おほなほびのかみ おほなほびのかみの 檍原の九柱の神八十枉津日神神直日神大直日神 そこつわだつみのみこと そこづゝのをのみこと なかつわだつみのみこと なかづゝのをのみこと 底津少童命底筒男命中津少童命中筒男命うはつわだつみのみこと うわづゝのをのみこと あはのみとおよびはやすいなと むはしら かみ表津少童命表筒男命粟水門及速吸名門の六柱の神いわづゝのかみ かむなほびのかみ おほなほびのかみ そこづゝのかみ おほあやづびのかみ磐土神直日神大直日神底土神大綾津日神あかづゝのかみたちもろもろけがれはらたまきよたままをことよし さをしか赤土神達 諸の汚穢を祓ひ賜へ清め賜へと申す事の由を左男鹿やつみみふた

#### 身滌祓詞(みそぎはらひことば)

たかまのはら かむづまりま すめらがむつかむろぎかむろみ みこともち かむながら しろしめ 高 天 原 に 神 留 坐 す 皇 親 神漏岐神漏美の 命 以 て 神 随 と所知食で すめみをや み み のけがれ あらいさらん あわみなとまたはやすいなと いでまし ことあげ 皇 祖 の御身之穢濁を 滌 去 とて 粟水門及速吸名門に往坐て興言し のりたまはく これ ふたど いとはや ひむか たちばな おど あはぎはら いでまして 詔 日 此の二門は太 急しと日向の立 花の小戸の阿波岐原に往坐で かみつせ いとはや しもつせ いとよわし なかつせ みそぎはらひたま ときにあれませ 上津瀬は太 疾く下津瀬は太 弱とて 中津瀬に 濯 払 賜 ふ 時 生 坐る

#### 大祓詞(旧おおはらえのことば)

あまつすがそ もとかりたちすゑかりきり やはり とりさき あまつのりと して 天津菅曾を本苅断末苅切て 八針に取辟て天津祝詞の ふとのりとごと の 太祝詞事を宣れ

か くのら あまつかみ あめ いはと おしひら あめ やへぐも い づ ちわき 如此 宣ば天津神は天の磐門を押開きて 天の八重雲を伊豆の千別 ちわき きこしめさ くにつかみ たかやま すゑひきやま すゑ のぼりまし に千別て所聞食む 国津神は高山の末短山の末に登坐して たかやま い ほ り ひきやま い ほ り かきわけ きこしめさ か くきこしめし つみ いふつみ の 伊穂 理 短 山 の 伊穂 理 を 撥 別 て 所聞 食む 如此 所聞 食 て は 罪 と 云 罪 あらじ しなど かぜ あめ やへぐも ふきはなつ こと ごと あした みきり 不在と 科戸の風の天の八重雲を吹 放つ事の如く 朝の御霧 ゆふべ みきり あさかぜゆふかぜ ふきはなつこと ごと おほっべ を おほふね へ  $\phi$  の 御霧を 朝 風 夕 風 の 吹 掃 事 の 如 く 大津辺に居る 大船 を舳 ときはなちともときはなち おほわだのはら おしはなっこと ごと をちかた しげき もと解放艦解放て大海原に押放事の如く 彼方の繁木が本を やきがま とがまも うちはらふこと ごと のこ つみ あらじ はらひたま 焼 鎌 の 敏 鎌 以 て 打 掃 事 の 如 く 遺 る 罪 は 不 在 と 祓 賜 ひ きよめたまふこと たかやま の すゑひきやま の すゑ 清 賜 事を 高山之末短山之末より さくなだり おちたき はやかわ 佐久那太理に落瀧つ速川 世 ま せおりつひめ いふかみおほわだのはら もちいで かくもちいでいな の瀬に坐す瀬織津比咩と云神 大海原に持出なむ 如此持出往ば あらしほ しほ やほち しは やほあひ ま はやあきつひめ いふかみ 荒塩の塩の八百道の八塩道の塩の八百会に坐す速開都比咩と云神 如此持出往ば もちかゝのみ かくかゝのみ いぶきど ま いぶきどぬし いふかみ 持可可呑てむ 如此可可呑てば 気吹戸に坐す気吹戸主と云神 ねのくにそこのくに いぶきはなち かくいぶきはなち ねのくにそこのくに ま根国底国に気吹放てむ如此気吹放てば根国底国に坐す はやさすらひめ いふかみ もちさすらひうしなひ かくうしなひ け 速佐須良比咩と云神 持佐須良比 失 てむ如此 失 てば 今はじめ つみ いふつみ あらじ はらひたま きよめたまふこと あまつかみくにつかみ 始 て罪と云罪は不在と 祓 賜ひ 清 賜 事を天津神国津神やほよろづのかみたちとも、きこしめせ、まを 八百万神等共に所聞食と申す

大祓詞(新おおはらえのことば大正3年内務省制定) すめらがたつか たろぎ **皇 親神漏岐** たかまのはらいかかづまりまる天原に神留坐す 神漏美の命以ちて やほよろづのかみたち、かむつどった集へ場の 神識りに識り賜ひて 豊葦原水穂国を が皇御孫命は 安国となけく知ろし食 此く依さし奉りし国中に 事依さし奉りき 神掃ひに掃ひ 神問はしに問はし賜ひ 語問ひし磐根 樹根笠草の片葉をも語止めて 一天の 此く依さし奉りし四方の国中と 大倭日高見国を安国と定め奉りて「下つ磐根に営柱大敷き 罗風の吹き掃ふ事の如く 大津辺に唐る共船を 舳解き放ち艫解き放ちて 大海原に押し放つ事の如く 彼芳の繁末が本を 焼鎌の敏鎌以ちて 打ち掃ふ事の如く 遺る罪は在らじと 歳へ結び清め結ふ事を 嵩山の業

短前の案より 佐久那荒理に落ち多嵯つ 遠川の瀬に基す 瀬織津比売と云ふ神 芳海原に持ち出でなむ 此く持ち出で 往なば 荒瀬の瀬の八音道の八潮道の潮の八音会に基す 遠開都比売と云ふ神 持ち加加呑みてむ 此く加加呑みてば 気吹声に基す気吹声主と云ふ神 複菌

底宮に気吹き放ちてむ 此く気吹き放ちてば 報菌 底宮 に坐す速佐須良比売と云ふ神 持ち佐須良ひ失びてむ 此く佐須良ひ失びてば 罪と云ふ罪は 在らじと 誠へ結び清め給へと皆す事を 笑つ神 国つ神 八舌方の神等美に 聞食せと替す

#### 十種祓詞(とくさのはらへことば石上神宮)

たかまのはら かむづま ま すめむつかむろぎかむろみ みことも すめがみたち いあら 高天原に神留り坐す 皇親神漏岐神漏美の命以ちて 皇神等の鋳顕は とくさ みずのたから にぎはやひのみこと さず たま あま みおやのかみ ことをし し給ふ 十種の瑞 宝を饒速日命に授け給ひ 天つ御祖神は言誨 の たま いましみこと みづのたから も とよあしはら なかつくに あまくだへ 詔り給はく 汝命この瑞宝を以ちて豊葦原の中国に天降り ま みくらだな しづ お あをひとくさ やまひ こと 坐して 御倉棚に鎮め置きて 蒼 生 の病疾の事あらば この十種の みづのたから も ひとふたみ よいつむゆなゝ やここのたりや とな ふるべ 瑞宝を以ちて 一二三四五六七八九十と唱へつつ 布瑠部 ゆらゆら ふるべ な まかりしひと いきかへ ことをし たま まに 由良由良と布瑠部 かく為しては死 人も生反らむと 言 誨へ給ひし随 にぎはやひのみこと あめのいはふね の かはちのくに かはかみ いかるがみね あま 饒 速 日 命 は 天 磐 船 に乗りて 河内国の河上の 哮 峯 に天 のちやまとのくにやまべのこほり ふる たかには いそのかみの 降り坐し給ひしを その後大和国山辺郡布留の高庭なる 石上 かみのみや うつ しづ いつ まつ よよそ みづのたから みをしへこと あをひとくさ ため神 宮に遷し鎮め斎き奉り 代代其が瑞宝の御教言を蒼生の為 ふるべ かみごと つか まつ かれ みづのたから おきつかがみ へつかがみに 布瑠部の神辞と仕へ奉れり 故この瑞宝とは 瀛津鏡 辺津鏡 やつかのつるぎ いくたま たるたま まかるがへしのたま ちがへしのたま へみのひれ はちのひれ 生玉 足玉 死 反 玉 道 反 玉 蛇比礼 蜂比礼 八握剣 くさぐさのものゝひれ とくさ ふるのみたまのかみ たふと いや いつき まつ よし 品品物比礼の十種を 布留御魂神と尊み敬まひ斎き奉ることの由縁 たひら やすら き め あをひとくさ うへ かゝ わざはひ 平 けく 安 らけく聞こし食して 蒼 生 の上に罹れる災害また ふるひの はら や たま いのちなが いかしやぐはえ ごと もろもろ やまひ 諸 諸 の病疾をも 布留比除け 祓 ひ却り 給 ひ 寿命 長 く五十橿八桑枝の 如 く たちさか ときは かきは まも さきは たま かしこ かしこ まを立 栄えしめ 常磐に堅磐に守り幸へ給へと 恐み恐みも白す

#### ひふみの祓詞(はらへことば)

ひふみよいむなやこともちろらねしきるゆゐつわぬそをたはくめか うおゑにさりへてのますあせえほれけ (ん)

#### 十種神寶大御名(とくさのかむだからおおみな)奉唱

#### 布留の言(ふるのこと)

ひふみよいむなやここのたり ふるへ ゆらゆらと  $^{\circ}$   $^{\circ}$   $^{\circ}$   $^{\circ}$   $^{\circ}$  一二三四五六七八 九 十 布留部 由良由良止布留部

#### 天の数歌(あめのかずうた)

ひ ふ み よ い む な や ここの たり もも ち ょろづ 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千 万

#### 神社拝詞(じんじゃはいし)

かしこ おしま 「神社の名前」の大前を 拝 み奉りて 恐 み 恐 み 恐 み まを おほかみ ひろ あつ みめぐ かたじけな まつ たか たふと みをし 白さく 大神の広き厚き御恵みを 辱 み奉り 高き 尊 き神教へのま すめらみこと あふ まつ なほ ただ まごころもち まこと みち たが こまに 天 皇 を仰ぎ奉り 直き正しき真心以て 誠 の道に違ふことまく 負ひ持つ業に励ましめ給ひ 家門高く 身健やかに 世のため ひと へっ くさしめ給へと 恐 み 恐 みも 白す

#### 稱言(たたえごと)

つきのみやまのおおかみ いではのおおかみ ゆどののみやまのおおかみ 月 山 大神 出羽大神 湯殿山大神と

おおみな たた まつ みつのみやまのおおかみ おおかみおおかみ ひ つかがやくくとうとしゃ 大御名は稱へ奉りて 出羽三山大神 大神大神御稜威赫灼 尊 哉 大神大神御稜威赫灼 尊 哉 大神大神御稜威赫灼 尊 哉

#### 明治天皇御製

国民もつねにこころをあらはなむみもすそ川の清き流れに 榊葉にかくる鏡をかがみにて人もこころをみがけとぞ思う ちはやふる神のまもりによりてこそわが葦原のくにはやすけれ とこしえに國まもります天地の神のまつりをおろそかにすな わがくには神のすゑなり神まつる昔のてぶりわするなよゆめ おごそかにたもたざらめや神代よりうけつぎたるうらやすのくに めにみえぬ神のこころにかようこそ人の心のまことなりけれ あさみどり澄みわたる大空の廣きをおのが心ともがな さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきはこころなりけり おおぞらにそびえて見ゆるたかねにも登ればのぼる道はありけり

#### 明治天皇御製を終わりて

すめらみこと いやさか いやさか いやさか 天皇 弥栄 弥栄 弥栄